

外国語教育学会 (JAFLE) 第24回研究報告大会

会場 東京外国語大学

オンライン開催

2020年11月8日(日)

オンライン受付は9時から始めます

開会の辞			
	発表者	所属	タイトル
第1セッション	司会 佐野洋、林俊成		
発音, 語彙, 統語			
09:30-10:00	寺田雄輝、杉山香織	西南学院大学大学院博士前期課程、西南学院大学	日本人フランス語学習者の音読における流暢さの測定
<p>近年、学習者の言語能力は複雑さ・正確さ・流暢さの側面から分析されている。本研究は、その中でも流暢さに焦点を当て、音読タスクにおいて聞き手に流暢であるという印象を与える要因と流暢性の構成要素を明らかにすることを目的とする。本研究では流暢性の構成要素を複数の時間的変数から測定可能であるとの立場に立つ。日本語を母語とするフランス語学習者を対象とした研究には、複数の時間的変数を考慮に入れ統計的に分析されたものはほとんど無い。そのため、本研究では IPFCJaponais コーパスの学習者の音読タスクと IPFC コーパスのネイティブによる音読タスクの時間的変数を用いて多重回帰分析を行う。流暢性の要因を考察し、音読指導への提案を行う。</p>			
10:00-10:30	石崎達也	東北大学大学院文学研究科 言語科学専攻言語学専攻分野 博士課程	F0 変動量による母音の緊張性の制御と発音方法の検討の試み — 緊張・弛緩母音のペア /i:/と/i/の発音指導への応用—
<p>緊張・弛緩母音のペア/i:/と/i/の発音指導を行う上で、基本周波数 F0 の変動量が重要となる可能性を提示する。第 1 フォルマント周波数 F1 の時間経過に伴う変動量である第 1 フォルマント移動の角度 $\theta 1$ を、母音の緊張性の指標とみなすことができるが、$\theta 1$ の絶対値が大きな値をとるための条件は不明であった。日本語話者の母音「イー」を検討して、$\theta 1$ と F0 変動量の相関を調査した結果、F0 変動量の絶対値をある程度増大させることにより、$\theta 1$ の絶対値が大きくなるように制御できる可能性があることを認めた。このような場合、緊張性を明瞭に示す緊張・弛緩母音の発音方法を検討できることになり、緊張性を考慮した母音の発音指導の実現に寄与し得る。</p>			
10:30-11:00	福田 翔, 張 正	富山大学, 東京外国語大学	日本語母語話者による中国語のとりたて副詞の習得: 有標性と母語特性
<p>第二言語習得では、有標項目の方が無標項目よりも習得が難しいとされ、同じ項目が母語にあるかどうかはあまり関係がないということが指摘されてきた。この有標性を軸として習得順序を論じることは有益であると思われる。しかしこれまでの研究は、主に音韻や統語構造に偏ってしまっている。そこで本研究では、意味・機能に関係する「とりたて」を表す中国語の副詞</p>			

(“就”“也”“还”等)を取り上げ、日本語母語話者の中級・上級者の中国語作文コーパスの誤用や誤用タイプ、またその頻度等を手掛かりにして、習得順序には有標性に加えて中国語と日本語の形式と意味・機能の対応や母語の転移等の要因も関連していることを論じる。

11:00-11:30	ファム・ティ・タイン・タオ	東京外国語大学	日本語複合動詞「～込む」の教授法研究—ベトナム語母語話者のための指導方法の検討—
--------------------	---------------	---------	--

ベトナム語にも複合動詞に相当する複雑述語が存在するが、ベトナム語母語話者は、日本語の複合動詞の習得において、理解や使用に困難がある。こうした複合動詞習得における課題解決のために、ベトナム語母語話者向けの効果的な指導方法を検討したい。複合動詞の前項動詞と後項動詞の結合のみでは、意味の類推が不可能な場合がしばしばある。言い換えれば、特別な用法を持つ複合動詞、いわゆるコロケーションとして使われる場合が多い。本研究では、「～込む」を取り上げ、複合動詞の特徴を考えながら、認知言語学的方法と、対照言語学的方法を導入したベトナム語母語話者への習得実験を行うことによって指導方法の有効性を検証する。

11:30-13:00	休憩	理事会 (11:40~12:30)	
--------------------	----	----------------------	--

第2セッション 言語運用とその課題	司会 秋田辰巳		
------------------------------	---------	--	--

13:00-13:30	松澤水戸、川口裕司	東京外国語大学非常勤講師、東京外国語大学	日本人フランス語中上級学習者のフランス語自由会話における複合過去と半過去の使用と傾向
--------------------	-----------	----------------------	--

日本人フランス語中上級学習者の自由会話(個人的な経験談等、17 会話、計 165 分)をデータとして、複合過去と半過去の使用傾向と動詞の種類について、Vendler (1967)の4分類や telic/atelic verb 等を基準として分類し、Andersen (1995), Salaberry & Shirai (2002), Labeau (2005)のアスペクト仮説との関連性を考察する。上記 2 時制で使用された動詞の最も明瞭な傾向は、状態を表す動詞 être が複合過去の全使用数の 1%にも満たないのに対し、半過去の全使用数の約 66%であったことで、これは複合過去が完了を、半過去が未完了を含意していることと無関係ではない。他にも、動詞自体の持つアスペクト的意味と2時制の関連性を明らかにすることを試み、動詞アスペクトの習得過程についても考察する。国内ではフランス語自由会話データを用いた学習者言語の時制に関する分析は類例がない。

13:30-14:00	杉山香織	西南学院大学	リーディングにおける頻度情報を使用した未知語予測モデルの検証—A2 レベルのフランス語学習者を対象に—
--------------------	------	--------	---

読解理解には、使用されている単語に対して 95% (Laufer 1989)あるいは 98-99% (Hu and Nation 2000)の知識が必要であるということが分かっている。学習者の未知語を予測することができれば、レベルに合ったテキストを選択することや、語彙学習のためのリストを提供することが可能となるが、日本語を母語とするフランス語学習者に関する未知語の研究はほとんど行われていない。本研究は、フランス語学習歴 1 年半の A2 レベルの学習者を対象に、杉山(forthcoming)で得られた未知語予測モデルを検証することを目的とする。予測モデルを作成する際に用いたテキストとは異なるものを使用し、別の学習者グループに対して調査を行うことで、予測モデルの汎用性を考察する。また、頻度情報のみを使用する予測モデルの問題点を明らかにする。

14:00-14:30	長渡陽一	東京外国語大学特別研究員	初級段階における自由作文課題の使用語彙調査
--------------------	------	--------------	-----------------------

自由作文は、語彙や文法を総合的に駆使して自らの意志を伝える最終目標の1つといえる。必要な語彙や文法を特定するのが難しく、初級では行いにくい、作文過程で語彙や文法を自ら学習する牽引効果があり、初級でも有効と考えられる。そこで初級段階で自由作文にどのような語彙や文法がどの程度使われたかを観察した。

本発表では、高校の韓国語授業で課した、韓国に関連した内容での自由作文を観察した。ただし、表現したいこと(日本語)を観察するため、韓国語に訳す前に日本語で書かせた作文に使われた日本語の語彙や文法を分析した。その結果、自由作文といえども語彙については使用頻度100位までの語彙で作文全体の60%、200位までで70%をカバーしていることなどが分かった。つまり重点的にこの200語を学習し、他に辞書を調べる力をつければ初級でも自由作文課題が可能なが分かった。

第3セッション 授業改善, 指導方法	司会 川口裕司、佐藤玲子		
14:40-15:10	小澤咲	東京外国語大学総合国際学 研究科・東京国際大学	ZOOM を活用した日本語読解授業のオンライン化を考える

昨今、Covid-19の影響下、世界中で授業のオンライン化が急務となっている。日本語授業もその例に漏れず、教員たちは試行錯誤しながらも実施に踏み切る他に余地がない状況となった。しかしながら、対面授業が前提であった語学授業をどのように効果的にオンライン化し、無理なく進められるのかについては、まだまだ手探りで情報が不十分かつ未成熟である。本発表では、とりわけ演習を含む読解を中心とした授業をオンラインで実践するにあたり問題となる留意点等を授業内容、評価方法にも言及しつつ報告し、オンラインでの語学授業を今後、その場しのぎの代替案から、オンラインの特性を生かした理想的な教育の場へ昇華させる可能性について検討する。

15:10-15:40	結城健太郎・白澤秀剛	東海大学	オンライン語学授業の形態と理解度-主体的学修分類の観点から
発表者らは学生の主体的学修行動を、成長や獲得を目的とした学修方略の使用頻度と不利益回避を目的とした学修方略の使用頻度の2要因により分類し、学習者の授業への取り組み状況・学習成果と比較しつつ、検証を行っている。コロナ禍によるオンライン授業期間中、異なる授業形態(オンデマンド型、ライブ型)、レベル(入門～中上級)、分野(文法、会話等)、担当教師(日本人、母語話者)のスペイン語科目において、授業の理解度と主体的学修行動についての調査を行った。どのようなタイプの学習者がどのような条件のオンライン授業で高い理解度を得ているのかを明らかにする。			

15:40-16:10	守屋久美子	東京外国語大学大学院総合 国際学研究科博士後期課程	インターネットを利用した日本語教育実習における学習環境デザインと関係性構築: 日本語教育専攻の非日本語母語大学院生を対象に
本研究ではインターネット上の日本語教育実習の学習環境をデザインし、その環境下におけるリソースの利用と相手との関係性構築について検討した。日台の大学間で行われた実習終了後に「日本語教育実習生(非日本語母語話者)」(以下、実習生)2名に行った半構造化インタビューを文字化し、SCATを用いて分析した。実習生は信頼性をもとにリソースの活用を行った。相手の反応を参考にして教授不安解消を図ったが、インターネット上のインタラクションにおける時間的・物理的問題が理想との乖離を生み出した。一方、互恵的な関係性構築がなされた場合は時間的・物理的問題が軽減した。アイデア共有を促進する批判的な内省の場を設定する重要性が示唆された。			

16:10-16:40	染谷藤重	京都教育大学	高校生の英語の授業への動機づけと英語学習へのエンゲージメントとの関連性の検証
本研究では、高校1年生から3年生を対象として、自己決定理論に基づいた動機づけ、及び教育心理学的観点に基づいたエンゲージメントに関する質問し調査を行うことによって、英語の授業での動機づけが英語学習へのエンゲージメントにどのような影響を及ぼしているかを明らかにする。これまでの研究では、自己決定理論における欲求充足がエンゲージメントを予			

測するという事が明らかにされてきたが(Reeve, 2018)、日本の英語教育に置いては、未だ自己決定理論の枠組みで、動機づけと英語学習へのエンゲージメントとの関連性を論じたものはない。したがって、どのような動機づけがこのエンゲージメントを予測するかを検証することには、価値があると考ええる。

16:50-17:20

総会

閉会の辞